

暦応三年十月廿五日

弓削田孫増御前所

この意味は、国分寺領である上毛郡塔田村（豊前市）の政所職を田川郡の弓削田氏へ預けるから、年貢・公事の寺納を怠らないようにせよというものである。数少ない豊前国分寺関係の史料である。

三 鎮西管領足利直冬と郷土

足利直冬 足利兵衛佐直冬ただゆめは、足利尊氏の長子であるが、正室の子でないため、尊氏は彼を優遇することを避けてきた。尊氏の弟直義は、独身で、子がいなかったから、直冬を養子としてかばっ

ていたが、尊氏の執事高師直こうのちらなむねは、直冬を尊氏に近付けることを嫌い、両者は険悪な状態にあった。

貞和五年（一三四九）四月、直義は、直冬を中国探題として、中国八か国の支配に当たらせるために備後国鞆とらの津に下向させた。間もなく、高師直のクーデターによって、直義が失脚し、直義にゆだねられていた一般政務および訴訟裁決権を尊氏の嫡子義詮よしのききへ譲らされた。

また、高師直は中国探題足利直冬の討伐を命じた。

足利直冬は、伊予や備後の武士に守られて、四国へ渡ったと、京都で噂うわさされたが、実は肥後の河尻幸俊の船で、肥後緑川の河尻に上陸し、大友一族詫磨宗直らに支えられて、大和太郎左衛門尉（宇都宮隆房カ）の城へ押し寄せた。『相良家文書』に次の記



直冬の花押

述がある。

又、京都・東国無為無事に候、相構え々々驚ろき動くこと有るべからざるの儀に候、又、中国の事、高越州(備前)下向の上は、不審無く候、鎮西も異なる事候はば、彼の人下向あるべき由、仰せつけらる旨、承り及び候

ご音信悦び入り候、肥前・肥後の凶徒蜂起の間、対治のため、去る三日、出府せしむるの処、肥後の国大和太郎左衛門尉の城を、佐殿の御事、河尻幸俊・詫磨宗直以下の輩、取籠め候て、攻めるの由、注進あるにより、筑後孫次郎(武重孫四郎)並び筑前豊前両国の守護代と、同軍勢等を差遣し候いおわんぬ。当国の事、子細あるべからず候か、郡内の事、一向(たの)憑み存じ候、大田方二も談合有りて、相構々々警固あるべく候、肥前の事、沙汰の最中に候、是又、子細有るべからず候、恐々謹言

(頼応元)
四月廿日

(少末)
頼尚(花押)

(原文は漢文)

すなわち、肥後・豊前・筑前の守護少弐頼尚は高師直の命令を受けて、大和太郎左衛門尉(宇都宮頼房の長子の意か)の城救援のために、弟の資尚および筑前・豊前の守護代に両国の軍勢を率いて出張するよう命じた。このときの筑前国守護代は饗庭右衛門藏人宣尚(あえばののむじ)、(刈田庄の地頭職を所持していた饗庭弾正左衛門宣兼はその一族)、豊前国守護代は宇都宮一族西郷兵庫允(じょうまきかひ)顯景であると思われる。

少弐頼尚の 鎮西管領一色道猷と対立していた少弐頼尚は、観応元年(三五〇)九月には、「京都より直冬支援 仰せ下さるる子細候の間、佐殿の御方に参じ候」と、足利直義の内命を受けて、直冬を婿に

迎え、直冬方となった。

少弐頼尚の支援を得た直冬方は、急速に勢力を増大させた。

当国の凶徒等、陣を如法寺左篠に執るの間、対治のため、明日十七日罷向い候、後攻として、一族等を相備え、山国より発向せしめ、軍忠を致さるべく候、よつて執達件の如し

観応元年九月十六日

（西郷頼景）
兵庫允（花押）

田口三郎殿

（原文は漢文）

少弐頼尚の被官となつて、豊前の武士を指揮統率していた西郷頼景は下毛郡の田口氏へ、如法寺（ぬほうじ）に陣取る一色範氏方（宇都宮公景・如法寺氏等カ）を攻撃するために山国方面からの後攻めを命じている（『田口文書』）。

この年十一月十六日付の『阿蘇文書』には「豊前国凶徒退治の事、公方より御教書を成され候の間、取り進じ候、（中略）一、大友兵部大輔（氏宗）殿方へも豊後国凶徒対治の事、御教書を成され候、同じく御談合候て、急速御退治あるべく候はば悦び存じ候」と、頼尚は、直冬のことを「公方」と呼び、その発する文書を「御教書」と称して、阿蘇大宮司惟時に大友氏宗との協力を依頼している。

この年、年号が観応と変わるが、直冬はこれを用いず、貞和の年号を使用し続ける。南朝は正平の年号を使うから、九州では、まさに鼎立（ていりつ）の格好となった。これより前、一色道猷の子直氏は直冬らの勢いに押され、赤間関へ逃れ、「京都の御左右（そ）を相待つため打ち越した」と弁解した。

十二月十三日、足利尊氏は自ら直冬の討伐を決意して「九州の事、片時も急ぎ思しめし候間、急速打通る



西郷頼景の花押

べく候処、四国・中国の事、この辺において沙汰あるの最中なり、落居せしめば、不日下向すべし、その間、用意を致し、籌策を廻らすべし」と、將軍の奉公衆である大友一族田原入道正曇へ籌策を命じ、一色道猷は宇都宮公景へ直冬に与同した元永弥次郎跡元永村、武藤対馬左近將監入道跡伊方庄、宇都宮薩摩彦次郎跡肥後国岩野村、宇都宮壹岐弥太郎跡肥後国木葉村、北条家時跡豊前国吉田庄地頭職を与えて、味方に繋ぎとめようとした。

観応元年十二月、尊氏中国出陣の先発隊として、飯沼兵庫助入道が下向し、豊前東部（上毛・下毛・宇佐郡）の友枝・永添・高瀬・坂手隈・赤尾などで、秣・深水の直冬方（武藤一族カ）と合戦があり、野仲氏の庶家野依弾正忠貞輔・山田三郎・田口三郎が一色道猷方として参陣した。

少貳頼尚は翌年正月、肥前の武士を率い豊前へ出陣した。

観応の擾乱と直冬

足利尊氏が直冬討伐のために中国路を西下している留守中、京都で蟄居状態にあった足利直義が河内へ走って、南朝方へ降り、その兵力を借りて京都奪取を図り、留守を預かっていた足利義詮を逃亡させた。このため、尊氏が高師泰・師直兄弟とともに、直冬討伐を中止し、帰洛してくるのを観応二年（一三五二）二月直義は摂津打出浜で待ち受けて、激戦のすえ破って尊氏を屈伏・和睦させ、高師直・師泰兄弟を滅ぼして、失っていた政治の実権を奪回し、三月、直冬を正式に鎮西管領とした。

しかし、直義時代は長くは続かず、この年の八月、今度は尊氏が南朝方へ降り、直義を圧迫して北陸へ走らせて、京都を奪回し、更に直義を追って、北陸から関東・鎌倉へと追い詰め、ついに毒殺した。これを観

応じょうらんの擾乱じょうらんという。

観応二年九月、尊氏は田原貞広へ「高倉禪門（高倉）の事、子細を申さるにつき、合躰する所なり、その旨を存知すべし、次に直冬の事、彼の落居に依るべからず、先度の御教書の旨に任せ、不日、誅伐すべきの条、件の如し」と書き送り、直義と和睦はしても、直冬は誅伐ちゅうはつせよと命じた。

それでも、直冬による九州支配は、その後一年余も続いた。

光富城の戦い
このころ、光富城の戦いというものがあった。本町の光富が舞台となったのであろうか。

史料を掲げて考えてみよう。

小野三郎左衛門宗像資村所々軍忠の事、

去年八月三日、光富において御旗を上げ、軍忠を致しおわんぬ。次に宗像城に馳せ参じ御手に属し、大宰府少貳頼尚寄せ来るの時、度々の合戦に軍忠を抽じおわんぬ。次に十一月五日の夜、小倉城を追い落すの時、合戦の忠を致しおわんぬ。次に同十三日、当国府中に御発（御発）の時、光富に敵数輩楯籠るの間、押寄せ、同日、豊田太郎左衛門種本を打取るの時、自身手負いおわんぬ。此の如き軍忠の次第、ご存知の上は、御証判を賜り、後の証に備えんがため、言上件の如し。

観応三年三月廿三日

（一色道猷）

「承り候ひおわんぬ。判」

（『萩藩閩閩録』巻七一、原文は漢文）

尊氏がクーデターを起こして直義から再び政治の全権を奪い返したことによって、九州でも直冬に代わって鎮西管領の座に返り咲いた一色道猷の催促に応じて、観応二年（二三五二）八月三日、光富に旗を揚げた

宗像一族小野三郎資村は、一色道猷と共に宗像城に籠城して、少式頼尚の攻囲軍と戦い、小倉城攻略にも軍忠を励み、十一月十三日、国府に進発したところ、直冬方の豊田太郎種本らが、光富の城に籠城して抵抗したので、これをその日のうちに攻略した(第1図参照)。この時、自身負傷したということを確認してもらいたいというものである。『豊前志』に「黒岩城址」光富村にあり、城主未詳とある。『豊前古城記』に黒岩ヶ城由来申伝なしとある。この事件と関係があるのか。

このころ、豊前守護は少式頼尚から大友氏泰に代わっているので、国府を接収する作戦が行われたのであろうか。豊田姓は大野井など、行橋市にかなりあり、大蔵姓の在庁官人であったのではなからうか。もっとも、光富名は長門国豊東郡にもあったというから、長門国の出来事かもしれない。今後の課題としておきたい。

足利尊氏は、少式頼尚が所持していた筑前守護職を弟の大宰筑後左近将監資経へ与え、豊前の守護職を大友氏泰や宇都宮守綱へ与えた。しかし、少式頼尚の力が強く、守護としての実績を確認できるものは少ない。一色直氏は、尊氏が南朝方と和睦したのを機に、肥後・筑後の懐良親王方の力を借りて、太宰府の直冬・少式頼尚を攻め、観応三年(一三五二)十一月には窮地へ追い込んだ。



第1図 光富城跡

直冬・頼尚

しかし、尊氏と吉野方の和睦が正平七年（二三五二）閏二月十五日、崩れるとともに、一色

南朝方へ

直氏と懐良親王との間も、しだいに冷え、孤立して苦境に立たされていた少弐頼尚が、中国

地方へ逃れ南朝方に降っていた直冬の画策によって、南朝方に降り、菊池武光の支援で、太宰府浦城での一色直氏方の包囲を解くと、今度は、少弐勢を加えた懐良親王方が優勢となり、正平八年二月二日、筑前針摺原（筑紫野市）の合戦で、少弐頼尚・菊池武光軍が一色範氏軍の田原貞広一族多数を戦死させるなどの成果をあげて破り、一色直氏を肥前綾部城に追い込んだ（『北肥戦誌』）。

足利直冬は、これより前、長門国へ移り、やがて南朝方へ降伏して、安芸の毛利氏や山陰の山名時氏・師氏父子に擁せられて、伯耆国から上洛し、一時的ではあるが、京都を占領するほどの勢いを示した。

四 征西將軍宮懐良親王と郷土

懐良親王の

足利直冬が中国方面へ去って南朝方へ降り、その周旋によって、少弐頼尚が懐良親王方と合

九州入り

体すると、九州では南朝方が優勢となって、懐良親王の多年の苦勞が報われることになった。

後醍醐天皇の第十六皇子とされる懐良親王は、建武三年（二三三六）、天皇が叡山へ難を避けていたとき、五条頼元ら一二人に守られて、紀州和歌山辺から船出し、九州へ向かった。このとき七歳であったという。

熊野水軍に送られて、伊予国忽那島に着き、忽那義範に擁護されて三年を送り、更に瀬戸内海を西行すること三年、薩摩の山川港に入り、谷山城主谷山隆信に迎えられた。ここで六年を過ごし、肥後の菊池氏を頼